

ヒッタイト文化とヘブライ語聖書における神の概念 —神の表現—

アダ・タガー＝コヘン

要旨

今日、紀元前第二千年紀後半に栄えたアナトリアのヒッタイト人と、紀元前第一千年紀前半にカナンに存在した古代イスラエル諸王国との間に直接的な文化的つながりがあったことを指摘する研究者は少ない。しかしいずれの文化も、南はエジプト、北はアナトリア、東はメソポタミアとの間に深い交流があった古代中東圏に属しており、以下に検討するように、両者の宗教的概念と実践には共通の土壌が存在していた。

本稿では、神々、女神、およびその祭儀も含め、ヒッタイトの神の概念を取り上げ、古代イスラエルの宗教儀式と信仰との関連性を明らかにしてゆく。またヒッタイトの神の特有の性格を幾つか指摘するとともに、こうした特徴を通して、古代イスラエルの伝承の解明を図る。

キーワード：ヒッタイトの神、古代中東、聖書、古代イスラエル、一神教

1. はじめに

紀元前第二千年紀後半の時代に中央アナトリアから北シリアに勢力を拡大したヒッタイト人は、古代中東の文化圏に属し、近隣の民族から多くの文化を吸収するとともに、彼ら自身も、近隣諸国、特に北シリアの習慣や祭儀に影響を及ぼした¹⁾。現在、アナトリアのヒッタイト人と、紀元前第一千年紀前半にカナンに存在した古代イスラエル諸王国との間に直接の文化的つながりがあったことが指摘されることはほとんどない。しかしいずれの文化も、南はエジプト、北はアナトリア、東はメソポタミアとの間に深い交流があった古代中東圏に属しており、両者の宗教的概念と実践には、検証に値する共通の土壌が存在していたのである²⁾。ヒッタイトの神の概念における幾つの特徴は、第二イザヤ書に見られる厳密な一神教的思想が台頭する以前の聖書の神の概念を解明する手掛かりとなる。以下にヒッタイトの神の代表的な特徴を紹介し、その上で古代イスラエルの資料を検討して、両者の関係性を明らかにしたいと思う。

2. ヒッタイトのテキスト

ヒッタイトのテキストは、そのほとんどが古代遺跡から出土した粘土板に刻まれたものである。その中には翻訳文書もあれば、アナトリア内の異民族や、メソポタミアなどの近隣諸国の諸民族に起源を持つ宗教儀式や習慣が記録されたものもある。以下に、シュッピルリウマ1世に始まりその後継者に引き継がれたヒッタイトの新王国時代（紀元前1400年-1200年）のテキストを取り上げ、そこに見られるヒッタイトの神の概念を中心に記述する。こうした文書は、たとえ他所から借用されたものや翻訳されたものであったとしても、ヒッタイトで編集されている以上そこにはヒッタイトの文化及び宗教観が反映されている。

ヒッタイト人は、神が人間よりも強く、不死であることを除き、神の世界も人間の世界も同じようなものだと考えていた。神々は死なないが、新しい神が誕生するため、以前から存在する神は「古い神々」と呼ばれていた。こうした神は家族に関連する神であり、ヒッタイト語で *tuliyā*³⁾ と呼ばれる集会で集団となってその務めを果たしていた。

神の力はどのような形でも、またどの場所にも顕現するとヒッタイト人は信じていた。現にヒッタイトのテキストでは、シュメール語の DINGIR という文字が神々の名前の前だけでなく、山や泉、石、神殿の前にも用いられている。神は星や地上に存在する多種多様な物質や、気象現象だけでなく、死者の魂や悪魔の中にも宿っていた⁴⁾。天上にも、地上にも、冥府にも存在していたのである。

神を意味するヒッタイト語の単語 *šiu-* は、ギリシャ語の *theos* (神) の起源となる古印欧語であり、*šiuṇi-/šiuṇiyatar* という形で表記される場合もある⁵⁾。このうち *šiuṇiyatar* という単語は具現化した神の像を指しているものと思われる⁶⁾。またこの単語 (*šiu-*) には、抽象概念としての神や具体的な形の神 (神の像または象徴) を意味する幾つかの変化形がある。ヒッタイトの神像は、木材、石、金属などで造られ、宝石で飾られていた。人間の形をしているものもあれば、雄牛、鳥、鹿などの獣神の姿をしたものもあり⁷⁾、またサイズは小さなものから人間大のものまで様々で、太陽円盤などで象徴されるものもあった⁸⁾。具現化した神はヒッタイト語で *ešri-/eššari* というが、これは人間の形をした像・姿という意味である⁹⁾。また *šena-* という単語は、主に人を呪ったり病をうつしたりするための儀式で用いられる小型の置物や像を指す¹⁰⁾。

ヒッタイトの神々は、自分がどのような姿や形で顕現するかを選び取ることができた。儀式に関するあるテキストには次のように書かれている。「彼はやって来て女神を称えるであろう。さらに彼女 (女神) が *pithos vessel* を好まれるのであれば、彼は彼女を *pithos vessel* の形で具現化させるであろう。しかしそうでない場合は、彼は彼女を

huwaši-stone として具現させるであろう。あるいは彼女を像の形にする（崇拝する？）であろう」¹¹⁾。ヒッタイトのテキストには、ヒッタイト語で *šiu-naš per-* という名の神殿が数多く登場する（É.DINGIR^{LMM} という表意文字で表記されることもある）が、これは「神の家」という意味である。

またヒッタイトのテキストには、膨大な数の神や女神の名前が記されている。ヒッタイト人自身この神々の大集団を「千の神々」と呼んでいた。問題は神々の数が多いことではなく、こうした神々が様々な宗教的伝統に起源を持っており、ときとしてその区別が難しいということである。ほとんどの場合、言語学的根拠を基に区別が行われるが、地理的要素が勘案されることもある。以下の定型のあいさつ文からも分かるように、ヒッタイトのテキストでは神々という概念が一つの集合体としてとらえられている。

（わが）主（パランナ）、わが愛する父、わが女主人、わが愛する母に申し上げます。あなたの息子、タルフンミヤはこう語ります。「（わが）主にとって万事うまく運びますように。千の神々があなたがたを生きし続けてくださいますように。神々があなたがたをその手にやさしく包み込み、守ってくださいますように！神々があなたがたに命と健康と活力と長寿を、そして神の愛と神の厚意、魂の喜びをいつまでも与えてくださいますように。そして神々が、あなたがたの求めるものを与え続けてくださいますように」¹²⁾。

このあいさつ文では、「千の神々」が人間に益や害を及ぼす神の力の集合体として理解されている。

3. ヒッタイトのパンテオンの国民的特徴

イタマル・ジインガーは、神の世界に対するヒッタイトの理解をテーマとした興味深い論文を著し、その中で「ハッティの千の神々」の定義を検討するとともに、ヒッタイトの国民的、宗教的自意識について歴史的考察を加えている¹³⁾。テキストからも分かるように、ヒッタイト人は自分たちに益する神ならどの神でも崇拝していた。つまり異邦の神々も自分たちのパンテオンに加えていたと考えられるのである。ジインガーはヒッタイトのパンテオンを「どこまでも成長し続けるパンテオン」と呼んでいる¹⁴⁾。これは正式に認められた国家のパンテオンであり、ヒッタイト帝国の拡大とともに規模を増していった。しかし後に明らかになるように、シュッピルリウマ1世の治世以降、このパンテオンはヒッタイト中心地の地理的境界線によって厳密にその範囲が限定されていく。テキストが編纂されたのはこの頃である。

ヒッタイトのテキストには一連の神々の名が共に階層的に記載されており、その中に

パンテオンの概念を見ることができる。こうした神々の名はそのほとんどが国際条約と宗主権条約、および祈りの言葉の一部として今日に伝えられているものである。一連の神々に言及した最も重要な祈りは、ムワタリ2世が個人的に崇拝していた稲妻の嵐神 *piḥaššašši* に捧げたものであるが、この件については後ほど考察する。

ジンガーが上記の論文で述べているように、古ヒッタイト王国の時代にはシリアの神々との間に接点が築かれ、アレppoの神々がハットウシャの信仰に統合された。ハットウシャの信仰はもともと古代ハッティ人の土着のパンテオンとヒッタイト人の印欧系の神々を基礎にしていたが、アナトリアの南部と北部シリアがヒッタイトの領土に組み込まれると、フルリ人とルウィ人の神がハットウシャにもたらされ、パンテオンはその規模を拡大していった¹⁵⁾。ヒッタイト人は「習合的」な方法で神々に接していたと言われている。この点に関して最も頻繁に引用されるのが、紀元前13世紀のブドゥヘパ王妃の祈りの一節である。この中でブドゥヘパ王妃は、ヒッタイトのパンテオンの最高位に座すアリンナの町の太陽女神を、北シリアのフルリの女神ヘバトと同一視している。「おおアリンナ（の町の）太陽女神よ、わが女主人よ、あなたはすべての土地の女王！ハッティの土地ではあなたはアリンナの太陽女神と名乗っておられますが、あなたが造った杉の国（シリア）では、ヘバトと名乗っておられます」¹⁶⁾。

ヒッタイト帝国の後期時代を通して、ヒッタイトの王家はフルリ系の神々と伝統的なヒッタイトの神々を平等に崇拝していた。ただしヤズルカヤ遺跡の岩に彫られたレリーフをはじめ、現存する図像には、フルリの影響が色濃く表れている¹⁷⁾。パンテオンに正式に含まれる神々は、太陽神と嵐神、守護神／女神、および運命の神や健康の神などで構成される。彼らを牽引するのが、ハッティの嵐神とアリンナの太陽女神であり、ヒッタイトの地上の王と王妃に対応するヒッタイトの神々の王と王妃であった。

神々の特徴の中でとりわけ重要なものがその地域性である。神々の名は、地域とのつながり、すなわち神々が暮らし、自分の神殿を持つ町（同じ神殿に別の神々も一緒に祭られていた場合もあったが）との結び付きを通して認識されていた。その意味でムワタリ2世の祈りの言葉はとくに重要性が高い（CTH 381）。ジンガーはこのテキストを再編集し¹⁸⁾、一連の神々の名が、アリンナ、カタパ、ツイッパランダなど首都ハットウシャ近辺の名高い祭儀拠点に対応する形で列挙されていることを突き止めた。どの土地にも町の神とその配偶者が存在し、山や川も祈りで言及された。「ツイッパランダの嵐神、ダハ山、ツイッパランダの男神、女神、山そして川よ（i, 57-58）」。またネリカ（の町）の嵐神、サリッサ（の町）の嵐神、フルマ（の町）の嵐神などの神の名も唱えられている。つまりこのテキストには、ムワタリ2世統治下のハッティの中心地を区切る境界の地名が列挙されているのである。この点についてジンガーは次のように述べている。

地域の神々の名をこのように書き連ねた者にとって、ヒッタイトの神々の集会を構成するのは、ヒッタイト王国の中心地、すなわちハッティの地所（ハリユス川湾曲部）、高地地方、イシュワ、キズワトナ、そして低地地方の神々であった。[略] ここに名前が挙げられた神々の土地は、ヒッタイトの勢力圏に限られていた。[略] 南部および南東部の地域では、フルリ系、メソポタミア系、およびシリア系の神々が重要な存在であったが、これは決して、ヒッタイトの神々の集会がこうした遠方の地域にまで及んでいたからと解釈すべきではない。これらの神々は様々なアナトリアの祭儀に導入され、何世紀ものときを経て、こうした祭儀に欠かせない存在となった¹⁹⁾。

このように一連の神々の名は、「ヒッタイトの神々」と土地の間に直接関係があることを示唆している。つまりハッティの土地はその神々によって代表されているということである。テキストに記されているように、この土地では、これらの神々は皆「ハットゥシャ式の作法で」(*Hattušaš iwar*) 崇められていた²⁰⁾。

ヒッタイト人は、ヒッタイト系以外の神々を「敵の土地の神々」と呼んで区別していた²¹⁾。敵地を征服することができるように、ヒッタイト人は敵の土地の神々に対し、その土地を見捨てて自分たちの王に加勢するよう祈った。ただしこれらの神々がヒッタイトのパンテオンに加えられたわけではない。ヒッタイトの神の集団（神の集会）は一つの単位として行動し、「ハッティの土地」を代表していた。つまり異邦の神に対峙するハッティの国家的象徴だったのである²²⁾。異邦の神々の像は多くがハットゥシャに運ばれ、殆どの場合戦利品として各地の神殿に安置された²³⁾。「ハットゥシャ式の作法で」崇拝される場合もあったが、それはあくまでも敬意の念から行われたものであった。異邦の神々は、彼らが支配する土地でこそ重要な存在であり、だからこそその土地の征服に力を貸すよう求められていたのである。儀式に関するテキストには異邦の神々が大勢登場するが、こうした神々がヒッタイト人の信仰を集めていたことは十分に実証されていない。ヒッタイト人は、神は土地に宿るものと考えていた。そのためその神が祭られた現地の神殿で礼拝を行うことが必要であった。祝祭の時期になるとヒッタイトの王や王妃、王子たちがハッティ中心部の町を足繁く訪れ、それぞれの町の神に祈りを捧げたのもそのためである²⁴⁾。こうしたことから、ハッティの文書に記されたヒッタイトの宗教は総じて王家の宗教を示しており、その意味で国家的性格を色濃く帯びていると言えるだろう。

4. 神とその信奉者の関係性

前述したように、ヒッタイトの文書は大半が王家の所蔵であるため、その内容は王家や国家の宗教に関するものがほとんどである。王家の祈りでは、祈りを捧げる王族が、

主従関係において神の直接の僕（しもべ）と位置づけられており、これが人間と神の関係に対するヒッタイト人の理解を形成していた。ムルシリ2世の以下の祈りにもこうした理解が反映されている。

おお神々よ、わが主よ！昔日よりあなたは〔人間〕に心を寄せられ、決して人類を見限られることが〔ありませんでした〕。かくして人類は〔増え〕、あなたの僕（しもべ）は数を増やしました。僕（しもべ）は神々のために絶えず支度を整え、〔わが〕主よ、パンと神酒を捧げます²⁵⁾。

神に向けられた王や王妃の訴えや祈りには、必ず「わが主／わが女主人」「あなたの僕（しもべ）」という言葉が使われている。神と人間の関係性は、ハットゥシャの神殿職員に対する以下の指示にも見ることができる。

人の魂と神々の魂に何らかの違いがあるだろうか。否！決してそうではない！魂は一つであり、同じである。奴隷が主人の御前にはべるとき、彼は身体を洗われ、清潔な（衣服）を着せられる。〔略〕神々の魂に何らかの違いがあるだろうか。奴隷が主人を怒らせたなら、主人はその奴隷を殺すか、奴隷の鼻、両眼、両耳を傷つけるかもしれない。または彼（主人）は、奴隷、その妻、その子ども、その兄弟姉妹、その姻族、その家族、その男または女の奴隷を捉える（だろう）。あるいはただ彼を呼びつけるだけで、何もしない（かもしれない）。しかし彼が死ぬときは決して一人ではない。その家族も彼と行動を共にする（CTH 264, i, 21-33）²⁶⁾。

こうした関係は神に対する人間の依存度を大きく高め、人間に対し、常に主人、すなわち神々や女神を満足させることを要求する。現にヒッタイト人は、神々が満足しているかどうかを知るためにメソポタミアから導入した神託制度を独自に発展させ、神の意思を確かめていた²⁷⁾。神託が行われたのは、王が病に倒れたときや疫病や天災が発生したとき、あるいは戦争に負けたときなどである。最も重要な問いは、まず、こうした事態を招いたのはどの神であるかを発見することであり、続いて、その神が何に対して怒っているのか、そして、どうしたらその怒りを鎮めることができるのかということであった。この他にも、王の冬季のハットゥシャ滞在が安全かどうか²⁸⁾、あるいは神が特別な衣類や新しい召使を所望しているかどうかということについても神託が求められた²⁹⁾。

王家には神々の世話をする義務が課せられていた。中でも神々の宿る地上の場所、すなわち家や家具、衣類などの神々の所有物が置かれた場所は、神殿の仕組を通し、かつ王の指示に従って維持することが必要であった。ヒッタイトの歴代の王にとって、神官の手で神々を手厚く遇することは重大な関心事であった。特定の祭儀所の神官に対しては王が自ら頻繁に指示を与えており、この事実が神官の任務がいかに重要であったかを物語っている³⁰⁾。

神は常に応じてくれるわけではなく他国に去ってゆくこともあった。そのため儀式を執り行って神を呼び戻すことが必要であった。神の不在が恐ろしい事態を招くことを伝えているのが、嵐神テリピヌの神話である。怒りに駆られた嵐神テリピヌは、この世界を去り、すべての人間、木々、動物に死や苦しみを与えた。熟練者の魔術的な儀式によって、テリピヌの怒りは鎮まり、自分の国の面倒を見るために戻った³¹⁾。同じことは神々の召喚の言葉の中にも見ることができる。以下に紹介するのはアリンナの太陽女神への祈りである。

[おお、アリンナの太陽女神よ！偉大な誉れ高き女神よ！] [王にしてあなたの僕（しもべ）である] ムルシリが、こう言って私をあなたの元につかわしました。「行ってわが[女主人]アリンナの[太陽女神]に伝えよ。『私は[アリンナ]の太陽女神、私の崇拝する[女神]に祈ろう。[おお誉れ高き]アリンナの太陽女神よ、あなたが[神々と共に]天におられても、海におられても、山をそぞろ歩いておられようとも、あるいはあなたが[闘いのために]敵地に赴かれていようとも、この甘き香り、杉と油が今あなたを私の元に呼び戻しますように。』」（そして女神の心を和らげるために、杉と油、パンと神酒が捧げられる）³²⁾。

神々のもう一つの性質は、たとえ神々が特定の場所（地域や都市）を所有し、そこで暮らしていたとしても、神々自体は本質的に宇宙の一部であるということである。ある地域や都市の住民が神に対して罪を犯し、神の怒りを買った場合、神はその地を去って、その住民と敵対する者の側に回ると信じられていた。たとえばヒッタイトの王が敵の都市を包囲したときには次のような儀式が行われている。一人の巫女が様々な色の布を使って7本の道を作り、その上に食物や儀式の品々を並べて、次の言葉と共に（男女の）神々を呼び出した。「見よ！敵の町の神々よ[略]これらの布があなたの道となりますように。この（道）を通して出て行ってこちらに来て下さいますように！（ヒッタイトの）王の味方となり、あなたの土地を見捨てられますように！」³³⁾。こう唱えた後巫女は敵の町の神々に生贄を捧げ、食べ物とビールを供えて、これを食してヒッタイト王の側につくよう繰り返し神々に呼びかけたという。儀式が行われる間、ヒッタイトの王はその場に立ち会っていたと思われる³⁴⁾。

テリピヌの神話では災いが世界中に及んだが、一人の神の力が個人に働きかける場合もあった。とくにヒッタイト人の間には個人神という概念があり、ヒッタイト語で DINGIR^{LUM} ŠA SAG.DU-YA（文字通り解釈すると「私の頭の神」の意味）あるいは単に šiummi-（「私の神」）と呼ばれていた³⁵⁾。ハットゥシリ3世は、ハッティの王座へと導いてくれた彼の個人神、女神イシュタルに次のような感謝の祈りを捧げている。

女神の命により、私は神官ペンティプシャリの娘ブドゥヘパを妻にめとりました。私たちは（婚姻）し、[そして] 女神は私たちに夫 [と] 妻の愛を与えてくださいました。私たちは息子たち [と] 娘たちをもうけました。わが女主人があるとき私の夢枕に立ち（こう告げられました）。「(あなたの) 家族ともども私に仕えるように!」。そこで私は家族とともに女神の僕（しもべ）となりました。私たちが作った家の中で女神は私たちと共にあり、私たちの家は栄えました。これこそわが女主人、イシュタルの寵愛でした。[略] かくして私はハクピシュの王となり、妻はハクピシュの [王妃] となったのです³⁶⁾。

個人神はその信奉者に恩寵を与えた。ハッティの偉大な王妃ブドゥヘパは、エジプト王ラムセス2世に送った書簡の中でこう語っている。

それを成し遂げたのは私の個人神です。アリンナの太陽女神が嵐神、ヘバト、シャウシュカ（と共に）私を王妃の位につけたとき、彼女（個人女神）はあなたの兄弟（ハットゥシリ）と私をめあわせ、私は息子たちと娘たちをもうけました。ですから私の経験（?）とはぐくむ（?）力はしばしばハッティの人たちの口にのぼるのです³⁷⁾。

ブドゥヘパは、自分が多くの子に恵まれたことと王妃の座についたことは、彼女の個人女神の恩寵の賜であると自慢げに書き送っている。こうした祈りの中には、信奉者が自分の守護神である個人神に対して庇護を願うものや、ときには自分に苦しみを与えている他の神（神々）に取りなしを願うものさえあった。

神は彼に [対して] ひどく（略）怒り、[その目を] 別のところにそらし、カントゥツィリに行動する力を与えません。その神のおわしますところが [天であれ] 冥府であれ、あなた、おお太陽神よ、どうか彼の元へ赴いてください。行って私の神に話しかけ [そして] [彼に] カントゥツィリの言葉を伝えてください (CTH 373 i, 1-5)。

個人神の上位には「家族関係の神々」が座していた。あるテキストには、王に代わる存在として、一連の神々への呼びかけが行われている。

私の身体の神々、私の人格（文字通り解すると「頭」の意味）の [神々]、運命の女神たち、祖母の女神たち、国の神々、都市、山、（および）川の神々、父母の神々、男性の神々、女性の神々、すべての上位の神々 (KUB 17.14 rev.! 14-17)³⁸⁾。

また「父（先祖）の神々（すなわち家族の神々）が次男（と）長男をお守りくださいますように」(KUB 45.20 ii 10-11)³⁹⁾ という祈りの言葉もある。ここで注目すべきことは、神々の家族もまた特定の場所とつながっていたことである。ミラ・クワリヤ国の統治者マシュフィルワは、ムルシリ2世にあてた書簡の中で、自分の家来について次のように記している。

わが主人、国王陛下に申し上げます。あなたの僕（しもべ）マシュフィルワの言葉をお聞きください。「先日パズーが病に倒れました。彼の祖先神が彼に祟りを及ぼし始めたのです。彼が祖先神（*ŠA A-BI-ŠU DINGIR*^{MEŠ}「彼の父の神々」）に祈りを捧げることができるよう、私は彼を（ハッティに送り返し）ました。彼が神々への祈りを終え次第、どうか速やかに彼を私の元に送り返してくださいますように。また領地の状況についても彼にお尋ねください（KUB 18.15）」⁴⁰。

ヒッタイト人は、どの神からも恩寵を受けることができる代わりに、どの神からも祟られる可能性があると考えており、そのために、その（女）神が異教起源の神であっても、どうしたら神の怒りを鎮め、あるいは神に願いを届けることができるかを考えていた。ある預言のテキストに、アヒヤワとラツパの2人の異邦の神がヒッタイトの王宮に招じられ、病に伏したヒッタイトの王の運命について尋ねられたという記述がある。この訪ねてきた神々のために、ハットウシャのヒッタイト神に捧げられるものと同じ儀式が3日間にわたって執り行われたという。おそらく神々の像がハットウシャまで運ばれてきたのだろう⁴¹。

神々についてもう一つ注目すべきことは、ヒッタイトの王が死後神々の世界に移り住むと考えられていたことである。この世ではヒッタイトの王も王妃も普通の人間であるが、死と共に彼らは「神になり」（*šiuš kiš-*）⁴²、彼らを祭る儀式が行われていた。こうして王と王妃は下位の神となり、いと高き神々の系譜に加えられたのである。

神に関する以上の一般的な記述は次のようにまとめることができる。神々は多分に人間的性格を帯び、身体と心を持ち、飲み食いし、音楽を楽しんだ。物欲すら持っていた⁴³。神の意思は理解されなくてはならず、神官は、神の物理的要求を満たすとともに、神の意に沿うためにその意思を汲み取る義務を負っていた。

5. 「神の分割」と「新しい神」

以上に見てきたように、ヒッタイトの神々は、たとえば嵐神のように同じ名や同じ性質を持つにもかかわらず、異なる複数の場所を拠点としている場合があった。その中でも最も驚くべき顕著な例は、実に多くの名で呼ばれているヒッタイトの嵐神ではないだろうか⁴⁴。同じ神がこれほど多くの姿で顕現しているのはどういうわけなのだろうか。

ヒッタイトの文書の中に、アナトリア南東部のキズワトナに由来するテキストがあり、ここに夜の女神のために新しい神殿を建立する方法と、その神像を安置するための手順が記されている（CTH 481）。このテキストによると、夜の女神の住まう場所として新しい神殿が建立されたとしても、女神が元の神殿を離れるわけではないという。リチャード・ビールは2002年の論文の中で、このテキストで旧神殿から新神殿に神を「設

置する」という文脈で使われているヒッタイト語の動詞 *šarra-* について論じている。この動詞が「越境する／誓いを破る」と「分割する／切り離す／分配する」という2つの意味を持つことについては研究者の間でも意見が一致している⁴⁵⁾。ビールは、神々を「置く」という文脈でこの動詞が用いられている場合は「分割する」という意味に解釈すべきであると主張している⁴⁶⁾。

このテキストは、既に自分の神殿を持つ神のために新しい神殿を建立することについて述べたもので、新神殿の建設中に行う具体的な儀式など、様々な行為のことが記されている。2004年、ジャレド・ミラーがこのテキストの新しい版を出版し⁴⁷⁾、その後これとは別に神の「分割」について論じた論文を発表してビールの主張を擁護した⁴⁸⁾。

このテキストには、「旧神殿」と「古い神」からの変容を経て、新神殿と「新しい神」を「機能させる」ための一連の儀式のことが書かれている⁴⁹⁾。また旧神殿では神に次のような言葉をかけると記されている。「誉れ高き神よ！御身自身はそのままに、その神格を分かち合ってください。新しい神殿にもお渡りください。そしていと高き御座につかれますように！そしてこちらにお渡りになるときは、この御座だけにつかれますように！」⁵⁰⁾。しかし儀式の中で、どの行為が神格を分けるという意味での「分割」の行為に当たるのかははっきり分かっていない。儀式の主な手順は以下の通りである。新神殿が完成し、新たな神像と道具一式が安置されると、旧神殿の神官たちが、古い神像に結ばれた（羊毛製の）*ulihī-* と呼ばれる品に神を「宿らせる」（文字通り解釈すると「引き出す」）。また神官たちは神殿の用地の穴から女神を「引き出す」。なお女神は、彼女に豊富な食物を供えた儀式ゆえに、必ず旧神殿に戻ってくると想定されている。神官は *ulihī-* に神を宿らせ、これを容器に入れて新神殿に運ぶ。そして各地からその神を「引き出す」ために、新神殿から川へ行き、*ulihī-* を天幕まで運んでそこで生贄を捧げる。その後神官たちは新神殿に戻って神像を蔵に置き、*ulihī-* を持ってきて新しい神像に結ぶ。そして旧神殿から運んできた聖なる水と油で新神殿の壁を洗い、これを清める。次に神の前で生贄を捧げ、儀式のための穴を掘り、新しい神像と、新神殿の壁と道具に生贄の血を塗る。テキストは最後にこう締めくくっている。「そして新しい神と神殿は聖なるものとなる」⁵¹⁾。これは、神と神殿が機能するという意味だろう。

以上の行為は、神が新しい神殿を礼拝の場と認めたという意味に解釈すべきである。神は新神殿に顕現するが、その存在自体は「拡散」している。つまり一カ所で礼拝されている間にも、同時に世界に遍在することができるのである。儀式の内容からも分かるように、神は、神像や祭儀用の道具だけに宿るのではない。こうした道具は清められ、聖別されてこそ、神を呼び出すための依代となることができるのである⁵²⁾。

神々は身体を持つものと考えられていた。神々は音を聞き、においを感じ、飲食する

など、人間と同じ性質を持つが、同時に神々は捉えどころがなく、宇宙を自在に移動することができた。ヒッタイトのテキストから分かるのは、同じ神が様々な場所に顕現していたということである。顕現するのは別の神や女神ではなく、あくまでも同じ神である。ムルシリ2世のテキストには、その祖父に当たるトゥドハリヤが「新しい女神」を創造したときの様子が記されている。「私の祖先、偉大なトゥドハリヤ王がキズワトナの夜の神の神殿から夜の神を分かち、サムハの神殿で個別に礼拝を行った」(KUB 32.133 i 2-4)。ヒッタイトの「新しい神々」は、既存の神々のために新しい神殿や礼拝所を作ることにより誕生したのである。神殿が多ければ多いほど良いとされた⁵³⁾。「新しい神」について言及したある神託のテキストは、ある疫病が「新しい王の神」がもたらしたものであると告げている。これは新しい神殿と神像を捧げられた神の顕現と考えられるだろう⁵⁴⁾。この神は1人の同一の神の「分身」であるが、機能を確立した時点で「新しい神」、すなわち別の「独立した」神となり、良きこと、悪しきことをもたらすようになるのである。

6. ムワタリ2世と宗教改革の概念

ムルシリ2世の息子、ムワタリ2世は宗教改革を敢行したことで知られている。後継者が改革を中断しなければ、紀元前13世紀のヒッタイトの宗教に大きく影響を与えていただろう。ムワタリ王はその治世のある時期にハットウシャの神々をすべて新しい首都タルフンタッシャに移し、そこで自分の守護神である稲妻の嵐神 (*piḫaššašši*) を最高位の神として崇拝した⁵⁵⁾。ジインガーはこの新しい首都への移転を古代近東の他の支配者が行った遷都と比較して論じている。「青銅器時代後期、中東全域で新しい都が怒涛の勢いで造営された。バビロンのドゥル・クリガルズ、エジプトのアケトアテンとピラムセス、エラムのドゥル・ウンタシュ、ハッティのタルフンタッシャ、アッシリアのカール・トゥクルティ・ニヌルタなどである」⁵⁶⁾。パントオンの頂上に座す神を交代させるというムワタリの行為が王家の反発を招いたことは想像に難くない。最も重要な礼拝の拠点であり、ハッティの嵐神の御座所でもあったハットウシャからすべての神像を移動するということは他の神々に対する侮辱とも取られかねない行為であった。ヒッタイトの伝統では、ハッティの嵐神により、ヒッタイト王の座すところはハットウシャであると定められていたからである⁵⁷⁾。ムワタリの祈りから、ジインガーは、王宮で体験した困難ゆえにムワタリに自身の個人神であるルウィ系の神（この神は一般的な天の嵐神と同一視されていた）をヒッタイトのパントオンの長に据えることを決意させたと指摘する。ムワタリの祈りの中で、彼の神は「神の系譜の中で特別な位置を占めており、ヘバ

トとアリンナの太陽女神の配偶者としてハッティの嵐神に取り替わった」とみなされている。こうして稲妻の嵐神はムワタリの「唯一の神」となった。このことは、ムワタリがこの神に捧げた次の祈りの言葉にも現れている⁵⁸⁾。

稲妻の嵐神よ、わが主よ、私は一人の人間にすぎません。私の父はアリンナの太陽女神をはじめすべての神々に仕える神官でした。私は父から生を受けましたが、稲妻の嵐神が私を母の元から取り上げ、私を育て、やがてアリンナの太陽女神をはじめすべての神々に仕える神官の座へと私を導きました。そして彼は私をハッティの国の王に指名したのです。

(略) 私の息子、孫、ハッティの王ならびに王妃、そして王子と諸侯たちは、この先も常にわが主、稲妻の嵐神を崇拝するでしょう。そしてこう言うでしょう。「誠にこの神は偉大な英雄であり、正しい道を示される神である！」天の神々、そして山や川もあなたを称えるでしょう。

(略) 私、ムワタリはあなたの僕（しもべ）、私の魂は喜びに打ち震え、私は稲妻の嵐神をあがめ奉ります。私はあなたのために神殿を建て、祭儀を行います。わが主、稲妻の嵐神よ、どうかその中で喜び楽しめますように。

この祈りの内容からも分かるように、稲妻の嵐神はパンテオンの多くの神々の最高位に座する神となり、その位の高さゆえにハッティ全土に多くの神殿が建立された。ハッティの嵐神も稲妻の嵐神も共に嵐神であったが、信奉者にとっては異なる神であった。ちょうど「古い神」に由来する「新しい夜の女神」が「サムハのイシュタル」や先に述べた「新しい王の神」などの別の神とみなされていたように、古い嵐神と新しい嵐神が同一視されることはなかった。新しい神とは、いわば前世代の神々から生まれた、あるいはそこから創造された神とも言うべき存在だったのである。ムワタリが、守護神である *piḥaššašši* をどの神よりも篤く信仰していたことは間違いない。

7. 聖書に描かれた古代イスラエルの神々と YHWH

この30年で、とくにウガリット文書などの北セム語系資料の研究が進展し、古代中東の宗教という視点に立った古代イスラエルの神の概念に対する理解が深まっている⁵⁹⁾。古代イスラエルの宗教は実際に、その起源において多神教的であり、第一神殿が破壊される時期までは多神教として栄えていた。聖書のテキストならびにイスラエルやユダから出土した碑文にも YHWH 以外の神々の存在が記されており、こうした神々が人々の信仰を集めていたことが明らかになっている。このテーマを扱った論文はこれまでに数多く発表されており、ここでその全容を紹介することは不可能である。この章の目的はあくまでも、先に述べたヒッタイトの宗教を手掛かりに、古代イスラエルの宗教における幾つかの表現について考察を加えることであり、以下に一部の問題点だけを取り上げ

て論を進めてゆきたい。

7-1. YHWHの地理的定義

モーセ五書に描かれた YHWH の主な性質は、この神がカナンの地の支配者であり、その地に彼の民を導いているということである。YHWH は土地の神であると同時に、古代の一族の神（または神々）の延長線上に位置する神でもあり、出エジプト記の中では自ら「Ehyeh-asher-Ehye（有って有る者）」および「あなたがたの先祖の神」（出エジプト記3:14-15）と名乗っている。YHWH は、カナンの地を支配していたからこそ、この地を継ぐ者を指名することができたのであり（創世記15:18）、民の境を定める神とみなされていたのである（申命記32:8）。どの神がどの支配者にどの土地を与えるのが判然とするのは戦争によってであり、このことは士師記11章24節のエフタの物語を見ても明らかである（「あなたは、あなたの神ケモシがあなたに取らせるものを取らないのですか。われわれはわれわれの神、主（YHWH）がわれわれの前から追い払われたものの土地を取るのです」）。上述のヒッタイトの王が敵の土地を征服できるようにその土地の神々に力添えを祈るという儀式にも、こうした考えが表れているのは明らかである。ヒッタイトの王家は、ハッティの嵐神がその土地と土地に付随するすべてのものをヒッタイトの王に授けたという信念を奉じていた。IBoT 30.1のテキストには次のような一節がある。「ラバルナ王が神々に愛されますように！この土地は嵐神だけに属し、天と地の軍隊も嵐神だけのものです。嵐神はラバルナ王を為政者に指名しました。嵐神は王にハットウシャとすべての土地を与えました。ラバルナにその手で（直接）全土を治めさせてください。そしてラバルナ [王] の身体の近くに侵入する者があれば、嵐神がその者を滅ぼしてくださいますように！」⁶⁰⁾

以下の節からも分かるように、土地をめぐる YHWH と聖書の王との関係についても同じ信念が奉じられていた。「王が海から海まで／大河から地の果てまで、支配しますように」（詩編72:8）、「聖なる山シオンで／わたしは自ら、王を即位させた」（詩編2:6）、「求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし／地の果てまで、お前の領土とする」（詩編2:8）。現に聖書の王は YHWH の息子と呼ばれている（詩編2:7）⁶¹⁾。

しかしながら聖書に描かれた YHWH 像にはユダ王国の宗教観が色濃く反映されており、YHWH は一つの都、すなわちシオンことエルサレムと同一視されるようになっていった⁶²⁾。ダビデ王は首都をエルサレム（シオン）に移し、ヘブロン of 先祖の礼拝所を見捨てた。そして YHWH を自分の守護神としたのである。

エルサレム以外の場所にも礼拝所が設けられていたことは聖書にも記されているが⁶³⁾、その事実をさらに明確に示しているのが前世紀にイスラエルで発見された碑文で

ある。これらの碑文には、地域的に限定された YHWH のための礼拝所のことが記されている。クンティレット・アジュルド遺跡から出土した碑文には、北イスラエル王国の首都、シヨムロン（サマリア）の YHWH や、イスラエル南部の地域を代表するテマンの YHWH のことが述べられている。この点についてジェレミー・ハットンはこのように結論している。「クンティレット・アジュルドの碑文は、統一された共通の YHWH 像に単に地域色が加えられたことを示しているのではない。それどころか、むしろこの碑文に描かれているのは、限られた地域だけにひっそりと顕現する、断片的で流動的な紀元前8世紀初頭の神の姿である」⁶⁴⁾。ハットンは、クンティレット・アジュルドの土地神はテマンの YHWH であったが、別の姿で顕現する YHWH を同じ場所で信仰することもできたはずだと論じている⁶⁵⁾。この遺跡は紀元前8世紀前半のものであり、当時はイスラエルの王—おそらくヤロブアム2世—がこの一帯を支配していた。ここがイスラエルの土地であったことを考慮すると、この碑文には神の世界に対する古代イスラエルの宗教観が現れていると考えてよいだろう。またこの碑文は、女神アシラ (Asherat(a)/ Ashera) の存在にも言及しており、さらにヒルベト・エル・コム遺跡から出土したユダの碑文にも同様の記述があるが、この件については稿を改めなくてはならない⁶⁶⁾。

またヒルベト・ベイト・レヒ遺跡でも別の碑文が出土しており、ナヴェはその内容を次のように解釈している。「YHWH はすべての土地の神である。ユダの山々はエルサレムの神のものである」⁶⁷⁾。YHWH が所有する土地とは明らかにユダのことであり、この神は「エルサレムの神」である。同様に、歴代誌下32章19節にも神の正体が明確に定義されている。「彼らは、エルサレムの神を、人の手の業にすぎない諸国の神々と同じように考えて語った」⁶⁸⁾。

YHWH が様々な形で顕現することを示す証拠は多くはないが、証拠が存在することは確かである。ベンジャミン・ゾメルは最近の興味深い著作の中で、彼自身が「神の（複数の）身体」と名付けたテーマについての論を展開し、YHWH の性格の流動性について語っている⁶⁹⁾。著作の導入部でゾメルは、聖書の神が一つの身体を持ち、さらに幾つかのヘブライ語のテキストでは、神が人間的性質を備えた存在として描かれていることを指摘し、次いで北セム系とメソポタミア系の神々の性質を検証した上で、どの神も「流動的」で多重的存在とみなすことができると結論している。「一人の神は同時にいくつもの身体の中に宿ることができた。さらに神は断片的、あるいは漠然とした存在でもあった。(略) 一つの神の、その土地やさらに天においての様々な顕現が、どういうわけか、実質的に互いに同じであり、同時に互いに別物であるということが可能であった」(p. 12, 14)。第2章でゾメルは、クンティレット・アジュルドの碑文を根拠に、イスラエルの神の「流動性」という用語について持論を展開している (p. 38)。彼はヘブ

ライ語聖書の JE 文書に YHWH が「流動的」な存在として描かれていることを指摘した上で、聖書のテキストは2つの対立する伝承を伝えていると断じている。一つ目の伝統は神の「流動性」を肯定しているが（JE 文書）、二つ目の伝統、すなわち申命記文書（D）と祭司文書（P）の伝承ではこうした考えは表に出ず、一人の神を祭った神殿こそが安泰であり神聖であると強調している。この神は永遠にその神殿に宿るのだという⁷⁰⁾。ゾメルという「流動性」はヒッタイトの神の概念にも当てはまる。

ゾメルの論を受けて、ハットンはそのように指摘している⁷¹⁾。「顕現した神はいずれもヤハウエという名を共有しているが—ゾメルの言葉を借りればいずれも『同じ神である』が—信奉者たちの経験においては、それぞれの神は別々の生を送っていたものと思われる。[略] クンティレット・アジュルドに神が現れたことは自己矛盾とはみなされておらず、むしろ『断片的なもの』として、すなわちヤハウエが『別の存在として別の場所に顕現した』ものと理解すべきである」⁷²⁾。このように述べた上で、ゾメルを支持するハットンは、申命記6章4節の「われわれの神、ヤハウエは一つのヤハウエである」（ハットンの私訳）という「表明の曖昧さ」を指摘し、こう結論する。「申命記6章4節には不自然な構文が意図的に用いられている—つまり固有名詞がなぜか可算名詞として使われている—が（略）これは、ヤハウエの地域的顕現を区別することが構文上もまた神学上も不適切であることに注意を喚起するために、綿密に計算されてのことではないだろうか」⁷³⁾。

ヒッタイトのテキストには、「神の分割」すなわち一人の神を国内各地の多くの神殿に分けて祭り、それぞれに新しい名前（～の場所の～の神）を与えたことが記されている。その意味で、申命記6章4節の宣言は、YHWH の分身が各地に顕現するという考えに異議を唱えたものと解釈することができそうである⁷⁴⁾。

初期の頃、古代イスラエル人にとって YHWH は数ある神々の内の一人であった。その当時サマリアやユダでは神像や象徴を用いて神々への礼拝が行われていたが、こうした信仰は西セム系の宗教世界に属するものである。YHWH の起源がどこにあるのかはまだ完全に解明されたわけではないが、ダビデ王が YHWH を王家の信仰の頂点に据えたことは間違いなさそうである。YHWH のための儀式はエルサレムで行われており、王国が分裂した後は、エルサレムの王家の信仰と区別するために、ヤロブアムが YHWH 礼拝のために別の手順を導入した。このようにヤロブアムはサマリアの YHWH 信仰に力を入れたが、それでもなお聖書にはヤロブアムがベテルとダンに礼拝所を設けたと書かれている（列王記上12章）。サマリアが王都となるのは、それから約半世紀後のオムリ王の治世のことである（列王記上16:24）。

7-2. 幕屋におさめる神の聖櫃およびその他の品々をめぐる解釈

夜の女神の新しい神殿建立について書かれたヒッタイトのテキストには、神殿の構造と女神像の造り方が指定されており、最初に神像の造り方について、次いで他の品についての説明が記されている。ここには新しい神殿の建て方について細かい指示が与えられているが、出エジプト記25章以降でも幕屋の造り方についてモーセに指示が与えられており、両者の間に共通点を見ることができる。ヒッタイトのテキストで最初にすべきこととされているのは神像の建造であり、聖書の場合は聖櫃造りがそれに当たる。神像も聖櫃も金で覆い、装飾を施すよう指示されており、またいずれのテキストでも、その後半で材料の数や質、その使い方などについて細かい指示が与えられている。聖書のテキストからはまるで初めてこうした指示が与えられたかのような印象を受けるが、このテキストはおそらく昔の伝統を基にしたものと思われ、その伝承がヒッタイト（キズワトナ）の伝統と共通している可能性もある⁷⁵⁾。

ヒッタイトの新神殿の建立については、ある人物が作業を主導しており、常に祭司たちとともに儀式を執り行っていた。その人物とは王（または莫大な費用を要する神殿を建立できるだけの力を持った支配者）以外にありえない。テキストの中でその人物は「神を別のところに打ち立てる儀式の庇護者」と呼ばれており⁷⁶⁾、その存在は正に出エジプト記のモーセや列王紀のソロモン、あるいは歴代誌のダビデを彷彿とさせる。ヒッタイトのテキストには、油で新しい神殿を清めると記されており、神殿の道具や神像一式に血を塗ることによりその神殿は聖別される (*šuppeš-*) という言葉で締めくくられている。そして聖書に記された幕屋の話でも、やはり最後には油と血を塗って幕屋と祭司を聖別すると書かれているのである（レビ記8章、出エジプト記29章）⁷⁷⁾。

ヒッタイトのテキストと図像から、ヒッタイトの神官たちが神像を礼拝所に運ぶ役割を担っていたことが明らかになっている。神像の移動には雄牛に引かせた車が使われていたが、このことは、サムエル記上6章15節とサムエル記下6章の聖櫃を運ぶ記述を連想させる。神像を直接手で運ぶことができた者は神官と巫女のみであり、あるときには、神官が神像を箱の中に入れ、その箱が車で運ばれたこともあった⁷⁸⁾。

ヒッタイトの神の概念と聖書の共通点は祈りの中にも現れている。既に述べたように、ヒッタイトのテキストには数多くの祈りが含まれている。その中で、王子でありおそらく神官でもあったカントゥツイリの個人的な祈りの言葉を紹介しよう⁷⁹⁾。

わが主よ、わが母が私に生を与えて以来、わが主よ、あなたが私を育ててくださいました。わが主よ、[私の名]と私の名声はあなただけのものです。あなた [わが主よ] は私を善き人々の中に加えてくださいました。わが主よ、あなたは、私の行いを影響力のある（文字通り解釈すれば「強力な」）場所へと導いてくださいました。わが主よ、あ

なたは私を、あなたの体と心の僕（しもべ）カントウツイリと呼ばれます⁸⁰⁾。幼き頃より受けていたわが主のご加護、私はそのご加護を知り [感謝しています]⁸¹⁾。

この中でカントウツイリは、信奉者である自分自身を「あなたの体と心の僕（しもべ）」と呼んでいるが、この言葉は彼が神官であったことを示唆している。なぜならこれは、神官たちに神々の身の回りの世話をし、その *ištanzana*- すなわち「魂、意思、要望」に沿うよう指示を与える中で、彼らを叱責するために用いられる言葉だからである。詩編143編10節では「רצון」という言葉が次のような文脈で使われている。「御旨（רצון）を行うすべを教えてください。あなたはわたしの神。恵み深いあなたの霊（רוח）によって／安らかな地に導いてください」。

8. 結論

古代中東の文化について知れば知るほど、習慣や信仰上の共通点が浮かび上がってくる。ヒッタイト帝国と古代イスラエル人の間に直接の接点はなかったかもしれないが、いずれの文化も古代中東圏に属しており、両者の間では物資や思想、文学的伝承などが幅広く行き交っていた。ヒッタイトのテキストの方が古代イスラエルのテキストよりも古い伝承を伝えているが、聖書のテキストを精読すると、その中に旧伝承の名残を見つけることができる。ただしこうした伝承には後世の聖書編纂者たちの判断で脚色が加えられている。ゾメルは祭司文書と申命記文書の編纂者たちが JE 文書の神の「流動性」を隠そうとしたと指摘しているが、私も同じ意見である。そしてヒッタイトの資料は、この指摘を裏付ける新たな証拠を呈示してくれるのである。

注

- 1) 以下を参照のこと。Itamar Singer, “Hittite Cultural Influence in the Kingdom of Amurru,” in: Itamar Singer, *The Calm Before the Storm: Selected Writings of Itamar Singer on the Late Bronze Age in Anatolia and the Levant* (Leiden-Boston: Brill, 2012), 253-258.
- 2) 本稿が既に印刷過程にある段階で、古代中近東における神の存在に関する新しい著書が出版されたが、それにはヘブライ語聖書は言及されていない。しかしながらヒッタイトの神の描写については本稿と同じ方向にある。以下を参照のこと。Michael B. Hundley, *Gods in Dwellings: Temples and Divine Presence in the Ancient Near East* (Writings from The Ancient World Supplements; Atlanta, SBL, 2013), esp. 285-332 on Hittite culture.
- 3) この単語については以下の著作を参照。Gary Beckman, “The Hittite Assembly,” *JAOS* 102 (1982), 435-442.

- 4) この点については以下の著作に簡単な説明がある。Gary Beckman, “Hittite Religion,” in: *The Cambridge History of Religions in the Ancient World*, Vol. 1: *From the Bronze Age to the Hellenistic Age* (eds. Michael Renee Salzman and Marvin A. Sweeney, Cambridge University Press, 2013), 86-90.
- 5) 以下の著作を参照。Chicago Hittite Dictionary (=CHD) Š/3 *šiu-*, 472ff. また以下も参照。Alwin Kloekhorst, *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon* (Leiden, Brill, 2007), 763-765. 「*šiu-*」は DINGIR の他にも、シュメール語の ALAM またはアッカド語の *šalmu* (ヘブライ語の שַׁלְמוּ) という表意文字でも表記される。
- 6) Billie Jean Collins, “A Statue for the Deity: Cult Images in Anatolia,” in: *Cult Image and Divine Representation in the Ancient Near East* (ed. Neal H. Walls, Boston, American Schools of Oriental Research, 2005), 21.
- 7) いわゆる「ヒッタイト・インベントリー・テキスト」に神像と神の性格をまとめた表があり、ヒッタイトの神々が具現化した姿が記載されている。以下の著作を参照。Joost Hazenbos, *The Organization of the Anatolian Local Cults During the Thirteenth Century B.C.* (Cuneiform Monographs 21; Leiden-Boston, Brill, 2003), esp. the introduction, 1-9.
- 8) 詳しい説明と図解については以下の著作を参照。Billie Jean Collins, “A Statue for the Deity: Cult Images in Hittite Anatolia,” 13-19.
- 9) Jaan Puhvel, *Hittite Etymological Dictionary* Vol. 2 (Berlin-Amsterdam, De Gruyter, 1984), 313-315.
- 10) CHD Š/3, 369-372.
- 11) Joost Hazenbos, *ibid.*, 175.
- 12) Maşat-höyük 遺跡から出土したヒッタイトの書簡 (HKM 81)。音訳と翻訳については以下の著作を参照。Harry A. Hoffner Jr., *Letters from the Hittite Kingdom* (ed. Gary M. Beckman, Writings from the Ancient World 15; SBL, Atlanta, 2009), 240-241. 以下の著作に他のヒッタイトのテキストに記された同様の挨拶文が紹介されている。Harry A. Hoffner Jr., *ibid.*, 59-61.
- 13) Itamar Singer, “‘The Thousand Gods of Hatti’: The Limits of an Expanding Pantheon,” *Israel Oriental Studies* 14 (1994), 81-102.
- 14) Itamar Singer, *ibid.*, 90. 「様々な土地の神々が、まるで底なしの巨大な坩堝にも似たヒッタイトのパンテオンに集い、一つの不可分な存在へと組み込まれていった」。
- 15) ヒッタイトのパンテオンについては以下の著作を参照。Maciej Popko, *Religions of Asia Minor* (Warsaw, Academic Publications, 1995), 91-102, 110-115. アナトリアにおける Luwian religion の詳細な説明に関しては以下を参照。Manfred Hutter, “Aspects of Luwian Religion,” in: *The Luwians* (ed. H. Craig Melcher, HOS 68, Leiden-Boston, Brill, 2003), 211-279.
- 16) KUB 21.27 i, 3-6; 以下の著作を参照。Gary Beckman, “Hittite Religion,” 89. ハッティの王家を守護していたのがハッティの嵐神とアリンナの太陽女神であったことを考えると、王妃のこの言葉にはヘバトを崇拝する理由を説明しようという意図があったのかもしれない。

- 17) ハットゥシャのヤズルカヤ遺跡の岩に彫られたヒッタイトの神々のレリーフ像については、以下の著作で最新の研究成果が報告されている。Jörgen Seeher, *Gods Carved in Stone: The Hittite Rock Sanctuary of Yazilikaya* (tr. Giles Shepard, Istanbul, Yayinlari, 2011).
- 18) Itamar Singer, *Muwatalli's Prayer to the Assembly of Gods through the Storm-God of Lightning (CTH 381)* (ASOR, Atlanta, Scholars Press, 1996).
- 19) Itamar Singer, *Muwatalli's Prayer*, 176-177.
- 20) 異邦の神々のためにハッティの土地で行われる儀式についても同様である。
- 21) 興味深いのは、こうした神々が「異邦の」(*araḫzena*-「外部の」という意味) 神々とは呼ばれていなかったことである。しかし異邦人が神殿に立ち入ったり、神々のそばに近付いたりすることはヒッタイトの宗教法および国法の下で厳しく禁じられており、唯一外交上の代表者だけが、王の許しを得た上で神殿の礼拝に立ち会うことができた。CTH 264 ii, 6-10には次のように書かれている。「しかしながら、異邦の高官が何者かの元を訪れた場合、その人物が神殿に入ることを(許されて)おり(かつ)普段から神々と王の戸口をまたいでいる者であれば、神官はその者を神殿の中に[入れ]、飲食させるものとする。しかしハットゥシャの人間ではない外部の者が神々に近づけば、[その者は死なねばならない!] また(その人物を神殿に)入れた者は[誰]であれ、死刑に処する」。以下の著作を参照。Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood* (Theth 26; Heidelberg, Winter verlag, 2006), 73-74.
- 22) Itamar Singer は“The Thousand Gods of Hatti,” 83で古ヒッタイトのアニッタ・テキストを取り上げ、「われわれの神(神々)」と「彼らの神(神々)」という対立する概念、すなわちヒッタイトの神々と異民族の神々の区別について論じている。
- 23) Daniel Schwemer, “Fremde Götter in Hatti: Die hethitische Religion im Spannungsfeld von Synkretismus und Abgrenzung,” in: *Hattuša-Boğazköy: das Hethiterreich im Spannungsfeld des Alten Orients 6*. Internationales Colloquium der Deutschen Orient-Gesellschaft, 22.-24. März 2006, Würzburg (ed. Gernot Wilhelm, Wiesbaden, Harrassowitz, 2008), 137-157.
- 24) Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, 377-380.
- 25) Itamar Singer, *Hittite Prayers* (Writings from the Ancient World 11; Atlanta, SBL, 2002), 65.
- 26) このテキストと注解については以下の著作を参照。Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, 71ff.
- 27) 以下の著作に神託を受けるための様々な作法が詳しく説明されている。Richard Beal, “Hittite Oracles,” in: *Magic and Divination in the Ancient World* (eds. Leda Ciruolo and Jonathan Seidel, Ancient Magic and Divination II; Leiden, Brill, 2002), 57-81. 以下の著作も参照。Richard H. Beal, “Gleaning from Hittite Oracle Questions: On Religion, Society, Psychology and Decision Making,” in: *Silva Anatolica, Fs Popko* (ed. Pieter Taracha, Warsaw, Agade, 2002), 11-37.
- 28) これらのテキストの翻訳については以下の著作を参照。Richard Beal, “Assuring the safety of the king during the winter,” in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, et al., Leiden-Boston, Brill, 2003), 207f.

- 29) Gary Beckman, "Oracles," in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, et al., Leiden-Boston, Brill, 2003), 206f. 神の世界と人間の関係については以下の著作を参照。Billie Jean Collins, "Divine Wrath and Divine Mercy of the Hittite and Hurrian Deities," in: *Göttlicher Zorn und göttliche Barmherzigkeit in den Religionen des Orients und der Antike* (eds. Reinhard G. Kratz and Hermann Spieckermann, Georg-August-Universität Göttingen, 2008), 67-77.
- 30) ヒッタイトの神官職に与えられた様々な指示の内容、ならびに聖書の神官職の解釈との関連性については以下の著作を参照。Ada Taggar-Cohen, "Covenant Priesthood: Cross-Cultural Legal and Religious Aspects of Biblical and Hittite Priesthood," in: *Priests and Levites in History and Tradition* (eds. Mark Leuchter and Jeremy Hutton, Ancient Israel and Its Literature series; Atlanta, SBL, 2011), 11-24.
- 31) 「テリピヌは家に戻り、彼の国に心を向けた。窓の霧は消え、家から煤が消えた。祭壇には神々が戻ってきた。炉からは木灰が消えた。彼（テリピヌ）は畜舎の羊を解放し、牛舎の牛を解放した。母は子を慈しみ、母羊は子羊を、母牛は子牛を慈しんだ。テリピヌは王と王妃を<慈しんだ>。そして彼らの生、活力、そして未来（存在）のために、彼らに心を向けた」。翻訳については以下の著作を参照。Gary Beckman, "The Wrath of Telipinu," in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, et al., Leiden-Boston, Brill, 2003), 151-153f.
- 32) Itamar Singer, *Hittite Prayers*, 50 (§ 1).
- 33) KUB 7.60 ii, 31-32: *nu-uš-ma-aš ke-e TÚG^{HIA} KASKAL^{MES} a-ša-an-du nu-kán ke-e-da-aš še-er ar-ḫa i-ya-an-ni-ya-at-ten nu-kán A-NA LUGAL aš-šu-li an-da ne-ya-at-ten šu-me-el-ma A-NA KUR^{TI} a-wa-an ar-ḫa nam-ma ti-ya-at-ten.*
- 34) このテキストの扱いについては以下の著作を参照。Ada Taggar-Cohen, "Between *herem*, Ownership, and Ritual - Biblical and Hittite Perspectives," in: *Current Issues in Priestly and Related Literature: The Legacy of Jacob Milgrom and Beyond* (eds. Roy E. Gane and Ada Taggar-Cohen, Resources for Biblical Study (RBS) series of SBL Publications). (Forthcoming 2014)
- 35) 以下を参照。CHD Š/3, 476-477.
- 36) 翻訳については以下の著作を参照。Theo van den Hout, "Apology of Ḫattušili III," in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, et al., Leiden-Boston, Brill, 2003), 202 (Column 3:1-13).
- 37) KUB 21.38 obv. 57ff. Harry A. Hoffner Jr. による翻訳。 *Letters from the Hittite Kingdom*, 287を参照。
- 38) 以下を参照。CHD Š/3, 478.
- 39) 以下を参照。CHD Š/3, 481.
- 40) Harry A. Hoffner Jr., *Letters from the Hittite Kingdom*, 321-322.
- 41) Singer が "The Thousand Gods of Hatti," 96で指摘しているように、エジプトのエル・アマルナ遺跡で出土したテキスト (EA23) にも同じようなことが書かれている。これによるとミタンニの王トウシュラッタがニネベのイシュタルをエジプト王の元に送り

出したという。おそらく病床にあったエジプト王の回復を願ってのことだと思われる。ヒッタイトのテキスト CTH 570.1 ii, 57'-64' の音訳および翻訳については以下の著作を参照。Gary Beckman, Trevor Bryce and Eric Kline, *The Ahhiyawa Texts* (Writing from the Ancient World 28; Atlanta, Society of Biblical Literature, 2011), 192-193.

- 42) 以下を参照。CHD Š/3, 494.
- 43) ある神託のテキストに記された Arušna の神の怒りを鎮めるための質問が大変興味深い。LAMMA 神の蔵で王妃が金のヘッドバンドを作ったところ、Arušna の神が夢に現れてそのヘッドバンドを差し出すよう求めたが、王妃は応じなかった。王妃はヘッドバンドを侍従の家に預け、代わりに銀のヘッドバンドを2本作って Arušna の神に捧げたが、神はそれを受け取らず、怒りを現わにしたという。神託の作法については以下の著作を参照。Richard Beal, "Gleaning from Hittite Oracle Questions," 14ff. KUB22.70 のテキストの翻訳に関しては以下を参照。Gary Beckman, "Excerpt from an Oracle Report," in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, et al., Leiden-Boston, Brill, 2003), 204-206.
- 44) 以下の著作を参照。Philo H. J. Houwink ten Cate, "The Hittite Storm God: his Role and his Rule According to Hittite Cuneiform Sources," in: *Natural Phenomena: Their Meaning, Depiction and Description in the ANE* (ed. D. J. W. Meijer, Amsterdam, 1992), 83-148.
- 45) Richard H. Beal, "Dividing A God," in: *Magic and Ritual in The Ancient World* (eds. Paul Mirecki and Marvin Meyer, Leiden-Boston-Köln, Brill, 2002), 197-208。それ以前、研究者は文脈に応じて「移転する」または「取り除く」などの単語を用いてこのテキストを翻訳していた。
- 46) Beal, *ibid.*, 198に2つの例文が紹介されている。「そして私の兄（ムワタリ2世）の治世に、私（ハットウシリ3世）はサムハの女神 Šausga を分割（šarra-d）し、彼女のために Urikina に新しい神殿を建立した。「神託により分割（šarra-d）されることが決まった女神は、[神託により] Zithara に移されることになった。彼女は奥室に祭られるであろう」。CHD Š/2, 235に記された上記の文には「既存の神像、神殿、および礼拝所と同じものを別の場所に造ることにより、その神を分割する」という意味も込められている。
- 47) Jared L. Miller, *Studies in the Origins, Development and Interpretation of the Kizzuwatna Rituals* (StBoT 46; Wiesbaden, Harrassowitz, 2004), 259-439.
- 48) Jared L. Miller, "Setting Up the Goddess of the Night Separately," in: *Anatolian Interfaces: Hittites, Greeks and Their Neighbours* (eds. B. J. Collins, M. Bachvarova and I. C. Rutherford, Oxford, 2008), 67-72。ミラーのこの論文は神の「進化」について理解を深め、夜の女神をサムハのイシュタルと同一視すべきかどうかを考察することを主眼としている。
- 49) 新しい神 GIBIL DINGIR; 新神殿 GIBIL É.DINGIR^{LIM} // 古い神 karuili DINGIR^{LIM}; 旧神殿 karuili É.DINGIR^{LIM}.
- 50) ジャレド・ミラーの翻訳は以下に掲載されている。"Setting Up the Goddess of the Night Separately," 67。ビリー・ジーン・コリンズは以下の著作でミラー版とは若干異なる翻訳を発表している。Billie Jean Collins, "Establishing a New Temple for the Goddess of the

- Night,” in: *Context of Scriptures* vol. 1 (eds. William W. Hallo, *et al.*, Leiden-Boston, Brill, 2003), 177. コリンズによる翻訳「あなた、誉れ高き女神よ、あなたの性格／身体はそのままに、あなたの神格を分割して、これらの新しい神殿にお渡りください。そしていと高き御座におつきください」。
- 51) ヒッタイト語の表記は以下の通り。nu DINGIR GIBIL É.DINGIR-^{LIM}-ia šu-up-pe-eš-zi (KUB 29.4 iv, 40).
- 52) メソポタミアでは神を像に宿らせるために神像の口をすすぐ *mīs-pī* という儀式が行われていたが、私の知る限り、ヒッタイトのテキストにはこれに厳密に相当する儀式についての記述はない。このメソポタミアの儀式にキズワトナのヒッタイトフルリの *itkalzi* という儀式を関係づける最近の試みについては以下を参照。Rita Strauss, *Reinigungsrituale aus Kizzuwatna: Ein Beitrag zur Erforschung hethitischer Ritualtradition und Kulturgeschichte* (Berlin- New York, De Gruyter, 2006), 216-283. このメソポタミアの儀式については以下の著作を参照。Christopher Walker and Michael Dick, *The Induction of the Cult Image in Ancient Mesopotamia: the Mesopotamian Mīs Pī Ritual: transliteration, translation, and commentary* (Neo-Assyrian Text Corpus Project, 2001).
- 53) 礼拝に関するテキスト集の中に Ariuwa の町の嵐神の一覧が記載されており、2つの *huwaši-stone* が「2人の古い神」、神像1体、鎚矛1本、太陽円盤1枚が「3人の新しい神」とみなされている。KUB 38.23 obv. 7-9, 10, 11 CHD Š/3, 496.
- 54) KUB 5.3 ii, 1-2; 5-6 以下を参照。CHD Š/3, 476.
- 55) この行為については、「謝罪」と呼ばれるテキストの中でハットウシリ3世が簡単に触れている以外一切記録が存在しない。詳しくは以下を参照。Theo van den Hout, *ibid.*, 200. 「さて私の兄ムワタリが彼の神の命を受けて低地へ赴いたとき、彼はハットウシャ（の町）を去った。彼はハッティの〔神々〕と先祖の魂（逝去した歴代の王）を掲げ、〔タルフンタッシャ〕の土地へと運んだ。」
- 56) Itamar Singer, “The failed reforms of Akhenaten and Muwatalli,” *BMSAES* 6 (2006), 37-58, <http://www.thebritishmuseum.ac.uk/bmsaes/issue6/singer.html>. この引用は p. 37から。
- 57) IBoT 1.30. 以下を参照。CHD Š/1, 102.
- 58) Itamar Singer による翻訳。 *Muwatalli's Prayer*, 40.
- 59) 以下の著作は、以前の研究の視点も交えながらこのテーマを大局的に論じている。Mark S. Smith, *The Origin of Biblical Monotheism: Israel's Polytheistic Background and the Ugaritic Texts* (Oxford University Press, 2001). 以下の著作も参照。Mark S. Smith, *Early History of God: Yahweh and Other Deities in Ancient Israel* (Biblical Resource Series; Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 2nd Edition, 2002).
- 60) 翻訳については以下を参照。CHD Š/1, 102. また以下の著作と比較すること。Hans G. Güterbock, “Authority and Law in the Hittite Kingdom,” *JAOS Supp.* 17 (1954), 16. ヒッタイトのテキストの音訳については以下の著作を参照。Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, 235.
- 61) 以下の著作を参照。Norman C. Habel, *The Land Is Mine: Six Biblical Ideologies* (Minneapolis, Fortress Press, 1995), 17-32.

- 62) 以下の著作がこの2つの王国の信仰と宗教的実践の相違点に簡単に触れている。
Francesca Stavrakopoulou and John Barton, "Introduction: Religious Diversity in Ancient Israel and Judah," in: *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah* (eds. Francesca Stavrakopoulou and John Barton, London, T&T Clark International, 2010), 1-8.
- 63) 以下の著作を参照。Diana Edelman, "Cultic Sites and Complexes Beyond the Jerusalem Temple," in: *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah* (eds. Francesca Stavrakopoulou and John Barton, London, T&T Clark International, 2010), 82-103.
- 64) Jeremy M. Hutton, "Local Manifestations of YHWH and Worship in the Interstices: A Note on Kuntillet 'Ajrud," *JANER* 10.2 (2010), 205.
- 65) Jeremy M. Hutton, *ibid.*, 202-204.
- 66) 以下の著作の註釈部分で、これらの碑文の「アシラ」が YHWH の配偶者を指す一般名称なのか、それとも Asherata 神の個人名なのかという問題について考察が加えられている。Nadav Na'aman, "The Inscriptions of Kuntillet 'Ajrud Through the Lens of Historical Research," *Ugarit Forschungen* 43 (2011), 299-324. これらの碑文およびその場所についての最新の論文に関しては以下の著作を参照。Ze'ev Meshel, *Kuntillet 'Ajrud (Horvat Teman): An Iron Age II Religious Site on the Judah-Sinai Border* (Jerusalem, Israel Exploration Society, 2012).
- 67) この碑文は紀元前6世紀のもので、洞窟の中から発見された。内容は次の通り。(Khirbet Beit Lei 5): יהוה אלהי כל הארץ הרי יהוה לו לאלהי ירושלם. ただしこの解釈がすべての研究者に受け入れられているわけではない。参考までに以下の著作も参照。F.W. Dobbs-Allsopp *et al.*, *Hebrew Inscriptions: Texts from the Biblical Period of the Monarchy with Concordance* (New Haven-London, Yale University Press, 2005), 128.
- 68) ヘブライ語の表記は以下の通り。וידברו אל אלהי ירושלם כעל אלהי עמי הארץ מעשה ידי האדם. 詩編147編12節でもヤハウエがシオンの神と呼ばれている（イザヤ書4:5、18:7、24:23、ヨエル書4:16-17などでもヤハウエの名がシオンと並んで記載されているので参照のこと）。スペンサー・アレンが指摘するように「地名を従えた名前（シオンのヤハウエ）はフルネームのような役割を果たさない」ため、ある都市と共に YHWH の名が語られていても、それを別の神の名と解釈すべきではない。以下の著作を参照。Spencer L. Allen, "An Examination of Northwest Semitic Names and the Beth-Locative," *JESOT* 2,1 (2013), 61-82. この引用は p. 71から。
- 69) Benjamin D. Sommer, *The Bodies of God and the World of Ancient Israel* (The JTS, Cambridge University Press, 2009)。この著作についてはキンドルの電子版を参照した。
- 70) 神聖の概念およびこの概念と YHWH の特徴との関係については、同書第4章～5章を参照。
- 71) Jeremy M. Hutton, *ibid.*, 205-206.
- 72) Benjamin D. Sommer, *ibid.*, 13, 15から引用。
- 73) Jeremy M. Hutton, *ibid.*, 260.
- 74) これと対照的なのが、イザヤ書43章10節の「わたしの前には神は造られず／わたしの後にも存在しない」という記述である。

- 75) その後イスラエルの神が「イスラエルの人々のただ中に宿り、彼らの神となる」(出エジプト記29:45) ために、戒律が記された石板が聖書の神の聖櫃に収められる。また YHWH の姿が天幕の上の雲に現れ (出エジプト記40:34)、さらにソロモンの神殿にも顕現する (列王記上8:10-11)。
- 76) *nu-za DINGIR^{LAM} ku-iš ha-an-ti-i a-ša-ši nu-za a-pa-a-aš EN.SISKUR^{LÚ}SANGA MUNUS^{MEŠ} kat-re-eš-sa pa-ra-a UD-an wa-ar-ap-pa-an-zi* 「神を別のところに打ち立てる儀式の庇護者、神官ならびにカトリ女と呼ばれる女神官は翌日身体を洗い清める」。以下の著作を参照。Jared Miller, *Studies in the Origins, Development and Interpretation of the Kizzuwatna Rituals*, 277-278 (§ 8 A i, 52-54)。
- 77) これらの聖書の物語に様々な伝承が含まれていることは、ここで簡単に紹介した通りである。血で神官を聖別するという聖書の記述と、夜の女神のテキストの扱いについては以下の著作を参照。Yitzhaq Feder, *Blood Expiation in Hittite and Biblical Rituals: Origins, Context, and Meaning* (Writings from the Ancient World SS 2; Atlanta, SBL, 2011), 26-33. 血をめぐる別の解釈については以下の著作を参照。Billie Jean Collins, “A Statue for the Deity,” 29-32.
- 78) KBo 24.107には「彼らは神像を籠の中に入れて／据えた(?)」と書かれており、また KUB 53.14 iii, 15-16には「彼らは神像を車の中に戻して立て、彼の神官がその傍らで神像を支える」と記されている。これは神像が車から落ちるのを防ぐためだろう。聖書は、神官ではないウザが神の聖櫃に触れ、その場で命を落としたと伝えている(サムエル記下6:7)。神官以外の者が神の道具に触れることは許されていなかったのである。CHD Š/3, 496を参照。以下の著作には、サムエル記上6章に記載されたペリシテ人の宗教行為は古代イスラエルの宗教慣行によって説明できると述べられているが、むしろ神の怒りを鎮めるために行われたヒッタイトの神託との関係が深いと見るべきだろう。Victor Avigdor Hurowitz, “The Return of the Ark and Implemented Ox Omens,” in: *All the Wisdom of the East: Studies in Near Eastern Archaeology and History in Honor of Eliezer D. Oren* (eds. Mayer Gruber et al., OBO, Fribourg-Göttingen, Vandenhoeck&Ruprecht, 2012), 177-185。
- 79) Kantuzili とその祈りの詳細については以下の著作を参照。Itamar Singer, “Sin and Punishment in Hittite Prayers,” in: *An Experienced Scribe Who Neglects Nothing: Ancient Near Eastern Studies in Honor of Jacob Klein* (eds. Yitschak Sefati et al., Bethesda, CDL Press, 2005), 557-567.
- 80) [*nu-mu-za*] *ammel DINGIR-YA¹Kantuzilin tuggaš-taš ištanzanaš-taš IR-KA ḫalzait* (KBo 21.22 obv. 14-15)。
- 81) Itamar Singer, *Hittite Prayers*, 31 (§ 2’).